

駒場の東大生グループ

「足元の自然に 目を向けよう」

寮問題を機に生態調査

JR渋谷駅から歩いて十分ほど、東大駒場キャンパスのはずれに通称「一二部池(いちにしろい)池」といふ池がある。本郷にある兄弟分の「三四部池」に比べると、ほとんど無名。ここで自然環境や生態調査に取り組んでいる学生たちがいる。グループの名は「よいこ」。大学は、この池と近くにある駒場寮を含む一帯の再開発計画を進め、寮生たちが計画に反対して、対立している。「よいこ」

は、両者から距離を置き、再開発するならまずアセスメントを」と訴えている。彼らが池に通い始めたのは昨年秋から。当時、教養学部基礎科学科の四年生だった黒田啓行さん(三三)たちが研究室で卒業研究のテーマを話し合い、寮問題が話題になったのが発端だった。

樹木がうっそうと茂り、昼間なのに薄暗い池のほとりに、「よいこ」の面々が枝をかき分けながらやってきた。長靴に麦わら帽子、手にはメスシンター、計器、そしてザルにバケツ。「今日のわき水は量が多いな」「ほら、こんなにでかいアメリカザリガニがいっぱい」。無邪気に歓声を上げたよ。

池や樹木を調査する大学院生たち。黒田啓行(左)と黒田真由(右)が、駒場の東大駒場キャンパスの一二部池で



ぬいぐるみ自販機

おねだりとイヤに弱い?! 銀座の酔客

銀座通りのおもちゃ店の裏側に回り込むと、四十五の小窓が整然と並んでいる。中はぬいぐるみ、無縁操縦の車、お菓子などなど。ギフト用商品を扱う自動販売機だ。価格は千円単位で、三千円から一万円まで。

二十四時間営業。うたい文句は「いつでも、待たずに買える」。午後八時に閉店したあと、利用する人が多い。そのほとんど



生物や環境、エコロジーを専攻する身にとつて、寮周辺は身近に体験できる貴重な自然。「再開発に欠かせないアセスメントを、駒場寮では実施しよう」とし

「形跡もない」「僕らはい」ストとして社会に出ていすれ環境問題のスペシャリストとして。なのに今、足元の問題

に目をつぶっていいの「か」「じゃあ、そのアセスメントを卒業研究でやってしまおう」。そこから奮闘が始まった。

動物生態学専攻の黒田さんは、再開発対象地域のすべての樹木を調べた。千二百七本、六十三種あった。池の調査では、清流に

しかすめないはずのカワゲラと、汚れた下流にすむイトミミズが同じ場所で見つかった。わき水は、災害時に一万人以上の生活用水をまかなえる量だともわかった。

在学生三千人に意識調査をした。「キャンパスは自然が豊富」77%。「一二部池に行ったこと」がある7%。

「樹木の種数を十以上言える」9%。結果からうかがえたのは、環境問題に興味があつても、キャンパスの環境には無関心な学生たちだった。

卒業論文「よいこ」のキャンパス再開発は、「再開発が自然環境と学生自治を破壊する」と結論づけ、学生が再開発に参加すべきだと提案した。

「よいこ」という名前について、黒田さんは「意外性を狙った」と話す。「不毛な論争はもういい。昔み

たいに当局にたてつくほかりじゃだめだ。キャンパス開発に積極的にかかわるのは学生の権利であり、責任だ」という姿勢を、彼らなりにまじめに表現した言葉が「よいこ」だった。

メンバー六人のうち五人は大学院に進み、現在も調査を続けている。一二部池で生物学の実習をし、一般学生に駒場を知ってもらおうとガイドツアーをやつて、学生にとつて快適なキャンパス環境づくりが考えられないか。「よいこ」たちの夢はふくらむ。

大学が駒場寮閉止と三鷹市に新築建設の方針を打ち出したのは一九九一年。九三年には駒場寮と「一二部池」などを含めた一帯の跡地に、芸術、スポーツなどの複合施設「キャンパス・プラザ」を建てる構想が発表された。大学側は昨年、寮生に退去を通告。「寮はこの三月で正式に廃止された」とし、今年十月、建物の明け渡しを求める訴訟の前提となる、占有移転禁止の仮処分が東京地裁で認められた。寮生は「学生自治をつぶすものだ」と抵抗を続けている。

14、20日(決勝トーナメント) 北区滝野川体育館